三島由紀夫・方法としての貴種流離

――昭和三十年前後・「鰯売恋曳網」「海と夕焼」を中心に――

花崎育代

一

長篇小説『潮騒』（昭29・6）、『沈める滝』（昭30・1～4連載、昭30・4刊）を発表していた昭和三十年頃、三島由紀夫はむろん他にも、戯曲や短篇小説をも旺盛に執筆発表していた。『潮騒』での異郷からやってきた伝説上の人物として登場し、主人公新治に最後まであたかも伴走するかのようなデキ王子、[1]『沈める滝』の小説冒頭「恵まれすぎてゐた」と紹介される主人公を三島自らが「境遇でするのでもなくて自分の意思で流離する」[2]と述べる貴種流離。[3]このように、それらの長篇は、伝統的な貴種流離が現代小説ではいかに可能なのか、といったことを軸に発表されていたとも言えるであろう。しかしそれはストーリイといった内容のみならず、創作方法上の問題でもあったはずである。

創作の内容と方法における貴種流離。この問題を同時期である昭和三十年前後の作品のうち、ハッピイエンドの戯曲「鰯売恋曳網」と遠く欧州からの流竄を経た主人公をもつ短編小説「海と夕焼」という、いっけん、いわば両極にみえる作品を中心に考察していきたい。

二

「鰯売恋曳網」は『演劇界』（昭29・11）に発表され、昭和二十九年十一月、歌舞伎座にて鰯売猿源氏を中村勘三郎（十七代目）、傾城蛍火実ハ丹鶴城の姫を中村歌右衛門（六代目）で初演された。今日でも上演される人気演目である。

お伽草子からいろいろ探してようやくたどり着いた「猿源氏草子」を軸にした、と述べた上で三島は、「貴種流離」を加味するために「小夜姫の草子」などを取り入れたと語っている。よく引かれる一節だが、左に掲げておく。

私は大体、昔から室町時代のお伽草子が好きであつた。こ

の機会に、芝居になりさうなものはないか、とよみ返してみると、なかなかない。やつとぶつかつたのが、「猿源氏草子」で、話としては、「物臭太郎」の系列のものらしい。／（中略）／それから、けいせい蛍火（原本では「けいぐわ」と訓ませてゐる）の身の上についても、何か創作せねばならず、このはうは、「小夜姫の草子」などの一種の貴種流離譚の味を出さうと試みた。話そのものに典拠はない。

（「鰯売恋曳網」について」、歌舞伎座プログラム、昭29・11）

筋の大枠は三島が「原本」という「猿源氏草子」（「猿源氏草紙」）と同様に、伊勢の国阿漕が浦の鰯売猿源氏が、京の五条橋で「上臈」に一目ぼれ、及ばぬ恋と消沈していたが大名高家相手の傾城と知り、関東大名宇都宮氏[4]に扮して登楼、歌の才で恋を成就し夫婦となるというものである。しかし、猿源氏に歌の道を指南した海老名なむあみだぶつは「猿源氏草紙」では義父だが三島作品では少なくとも岳父とする記述はなく、猿源氏を「倅」と呼ぶ実父とおもわれる、などの差異がある。他に重要な相違があるが、以下、こうした差異や古典の引用の仕方といったところから「鰯売恋曳網」をみていくこととしたい[5]。

まず蛍火実ハ丹鶴城の姫である。

「猿源氏草紙」の蛍火においては、猿源氏が鰯売であることを嘆いていたが、歌の道に秀でているからやはり言う通り宇都宮殿なのだろうと思いなおし、「比翼連理のかたらひ」ののちには、鰯売と判明しても阿漕が浦に連れ立って富貴子孫繁盛した、と締めくくられている。お伽草子の蛍火は三島作品のように「鰯売こそわが良人」（「鰯売恋曳網」）、と思っていたわけではない。

しかし「鰯売恋曳網」では「鰯かうえい」の呼売り声の「美し」さに「魂あくがれ出で」「自分の意思」で―意思と境遇の相違をどこで判断するかはむろん困難ではあるのだが―丹鶴城をさまよい出で、人買に「廓に売り飛ばされ」ていた。しかしそれでも「観世音のみちびきにて」なんとか「鰯売る賤の男に会ひたし」と、日夜焦がれていたという。

「猿源氏草紙」では設定のないこの「実ハ丹鶴城の姫」という「貴種流離譚の味」によって、最終場面に近く、庭男実は丹鶴城の家臣である藪熊次郎太が携行する観音の厨子と、姫懐中の「金襴に包みし金無垢の観世音」とを照合する場面もある。作家の言を引きすぎのきらいはあるが、お伽草子「小夜姫の草子」をみておこう。

「さよひめのさうし」には、三島「鰯売恋曳網」発表以前の戦前の版で「解題」にこの時点で、これ「以外には、奈良絵本としての「さよひめ」の類本を見たことがない」という京大美学研究室蔵本「さよひめ」を翻刻した『室町時代物語集　第四』[6]などがあるが、ここでは同じく戦前の版でありかつ三島の「蔵書目録」[7]に記載のある横山重編『室町時代小説集』[8]（昭18・12、昭南書房）所収、清水観音の霊験で生まれたさよひめとともに壺坂観音本地

をも語る「さよひめのさうし」に拠ってあらすじを記しておこう。

大和国春日の里にいせやの長者という富者がいたが、子がなかったので、都に流行る清水観音詣でに夫婦そろって出かける。観音が夫婦の枕上に立って、〝姫を授けるが、かわりにその子七歳の折に父長者は死し貧窮する、それでもよいか〟、という条件を出し、長者夫婦は承知する。やがて「さよふけかたに」ひめが生まれ、さよひめと名付けられる。成長して姫七歳、観音の約束のときがきたが、観音は長者をむなしくするのは不憫と考えた。そうこうするうちに姫十三歳となり長者一家は栄華を極めていくが、長者は〝神仏すら偽りをのたまう、ましてや人間をや〟と言う。これを観音が聴いて「にくし」とおもったか、その年、長者は病に罹り翌年正月に死去、母娘は貧窮に陥る。

父の菩提を弔うにも先立つものがない、そのために我が身を売ろうと奈良の都にたち出でたところ、奥州から来た商人が千両で引き受ける。十日の猶予をもらい春日の里に戻り、母に千両「ひろひ申て候」と偽って母とともに父の菩提を弔う。商人に急き立てられ、身売りの千両で供養したため東へ行かねばならぬと母に告げ、母娘は泣き別れる。さよひめは慣れぬ徒歩での旅路、名所で歌を詠むなどしながら長い旅ののち奥州にたどり着く。そこで初めてさよひめは、土地のうるまが池の大蛇へ年一回の人身御供にするために買われたことを知る。いよいよ生贄に捧げられようと池に進むや十二の角持つ大蛇に対峙、さよひめは大蛇に向かい、互いに生あるもの、法華経を唱えたいと言う。経をあげると、大蛇は涙を流し、角落ち総身の苔も落ち、さよひめに劣らぬ美人となった。大蛇の姫が語るには、自分の父はこの地の地頭であったが亡き後を他にとられ、無念とこの池に身投げし苦患を受け九百九十九年、九百九十九人の贄をとりさよひめで千人のところであった、という。ありがたい法華経で苦患を免れ人間の姿となった、ありがたい、とさよひめを拝み千両と珠を奉った。

さよひめは春日の里に戻ると盲目となっていた母の眼を件の珠で治し再会を喜ぶ。やがてさよひめは父長者のように富者となり末繁盛と栄えた。大蛇の姫も上京し、さよひめと母と三人で同居した。

母の長者は三河国のみねの薬師としてあらわれた。さよひめは近江国竹生島の弁財天として福神となった。大蛇の姫は大和国壺坂の観音としてあらわれた。

以上が「さよひめのさうし」である。

三島の「鰯売恋曳網」では先述のように蛍火実ハ丹鶴城の姫は観音像を懐中に所持している。観音信仰の描出は、「まことの鰯売」と知って「かたじけない、観世音様」と拝み、あるいは、次郎太の厨子との照合のあと返却させ懐中にしまう際、「拝んで」という動作が書き加えられているだけではない。最終場面、猿源氏とともに七三から花道を通って入る場面でも「観世音の尊像を出して拝」むと記されている。

幕外にて鳴物を搗き直し、蛍火、懐中より観世音の尊像を出して拝み、猿源氏に手を引かれて入る

蛍火において、丹鶴城の姫として懐中にしている観音像が、ラストシーンで改めて確認される。すなわち三島「鰯売恋曳網」の蛍火には、姫が呼声にあくがれて城をさまよい出でたというのみならず、貴種流離のさよひめの、父供養のための身売、流離流浪と言うべき徒歩での長旅、大蛇の生贄という艱難に、さらに、壺坂観音の本地である、同じ池にかつて供された女人の千年にも及ぶ苦患が集合してその背後に存在している。

三島は蛍火をあてがきした中村歌右衛門をモデルにしたほぼ同時期の「女方」（昭32・1）で「芝居の裏の暗い美的な魂」[9]と記したが、こうしたハッピイエンドを裏で支える「暗」さの重要性―それをどのような要素で提示するか、あるいはしないのかも含めて―を知悉していた。

戯曲と小説、書斎と劇場を自身の「シーソオの両端」であるとその通有性を述べた上で、戯曲については「積木の瓦解」という比喩で「破壊との調和」を好んでいることを三島は「鰯売恋曳網」の翌年に次のように記している。

今でも私は小説を書き戯曲を書きつつ、その間に何の矛盾も感じない。劇場と書斎とは、私のシーソオの両端である。（中略）均衡と同じくらゐに破壊が好きなのである。正確に言へば、ひたすら破壊に向つて統制され組織された均衡の理念が、私の劇の理念、ひろくは芸術の理念になつた。／（中略）／現代日本の固定した小説理念は私を苦しめた。そこでいつか、戯曲の法則を強引に小説の法則へ導入しようと思ふやうになつた。

（「均衡への好み」、「破壊との調和」―「戯曲の誘惑」、昭30・9・6、7）

三島における少なくともこの時期の文学のありようを示す一節であろう。

さらに、貴種流離についてあらためて記しておこう。三島は、先に掲げた「「鰯売恋曳網」について」のみならずそれ以前、昭和二十九年九月に死去した折口信夫について述べた「折口信夫氏のこと」（昭28・11、改題「折口信夫」）などですでに語っていた。周知のように貴種流離の内容は、折口とほぼ同時期に柳田国男が「流され王」という名辞で示していたが、貴種流離譚という言葉自体は折口が、用いて定着したもの（初出は大正十三年十月発表の「国文学の発生（第二稿）」）である。[10]三島はその折口についてさらに翌年、左のように述べている。

清冽な抒情といふやうなものは、人間精神のうちで、何か不快なグロテスクな怖ろしい負ひ目として現はれるのでなけ

れば、本当の抒情でもなく、人の心も摶たないといふ考へが私の心を離れない。白面の、肺病の、夭折抒情詩人といふものには、私は頭から信用が置けないのである。先生のやうに永い、暗い、怖ろしい生存の恐怖に耐へた顔、そのために苦が生え、失礼なたとへだが化物のやうになつた顔の、抒情的な悲しみといふものを私は信じる。／（中略）先生の見出されたものは、笑ひや優雅それ自体ではなくて、人間の生存の慰めである笑ひや優雅といふものの、深い暗い本質まで、いつも見抜かずにはゐられなかつた方だと思へる。

（「折口信夫氏の思ひ出」、昭31・11）

この初出が折口全集月報であることを考えずとも、この一文が決して皮肉というようなものではなく、折口への三島の文学的ないわば共感と敬意を示すものであることは明らかであろう。「清冽な抒情」が可能であるのはそこに「怖ろしい負ひ目」があるからこそだと述べて、ここでも芸術の破壊的側面をもつ均衡を語っているのである。

「鰯売恋曳網」に戻れば、蛍火実ハ丹鶴城の姫の恋の成就というハッピイエンドに至るまでの自らの意思ではじまった貴種流離に、「さよひめのさうし」における女性の「破壊」的な流離、「負ひ目」「暗さ」を内包させることによってこそ、あるべき「調和」としての戯曲、文学を提示したということである。

三

そこで考えるべきなのが「鰯売恋曳網」でそもそもタイトルに表れている猿源氏である。

「鰯売る賤の男」であるが、父の遁世者海老名なむあみだぶつは、「昔はきこえた鰯売、その又むかしは関東侍」である。実在のなむあみだぶつは、足利家に仕えた武士であり、歌舞音曲に通じていたという[11]。先述したように「猿源氏草紙」ではなみあみだぶつは猿源氏の岳父だが、三島の「鰯売恋曳網」では義父であると明示的な表現はなく―むろん室町期の妻もつ男の恋、ではなく戦後的現代に上演する恋という枠組によることが大きい[12]はずだが―「倅」と呼ぶ実父と考えられる。猿源氏が「侍」の実子であるという変更は、猿源氏における貴種的正統性をより加味したものともいえるであろう。

しかしそのこと以上に、お伽草子にも存在する文句ながら

「伊勢の国に阿漕ヶ浦の猿源氏が鰯かうえい」

という呼声を繰り返すのみならず、その呼声の「美し」さに魅かれた蛍火実ハ丹鶴城の姫と夫婦となって一同唱和するその「阿漕ヶ浦」―「阿漕」を、全く意に介さずに本作を書いたと考えるのはきわめて困難であろう。

猿源氏が蛍火の前で寝入ってしまい寝言を言う。それが「伊勢の国に阿漕ヶ浦の猿源氏が鰯かうえい」であった。これを聴いた蛍火に「こなさんまことは鰯売で」はないかと問われる、大名に扮装した猿源氏は和歌の才でそれぞれの語を寝言に言った訳を取り繕おうとする。「猿源氏」「鰯」について「猿源氏草紙」における言い訳で用いられた歌や挿話であるのと同様、「阿漕ヶ浦」もこのお伽草子の歌を引いて弁明する。すなわち、この「阿漕ヶ浦」を蛍火にまず問われて、「寝言にまで歌枕が出ると見ゆる」として猿源氏は次のように言う。

そりやソレ「塩木とる阿漕ヶ浦に引く網も度重なればあらはれぞする」といふ歌の心を案ずるうち、寝言にも申しつらん。

「伊勢の国阿漕ヶ浦」は現在の三重県津市東南の海岸であるが、たとえば市古貞次氏は「猿源氏草紙」の注記で次のように記している。

伊勢神宮御料の魚をとる所で、昔は禁漁地。そこの魚売というは皮肉。[14]

鰯売の呼声が決定的に重要となる戯曲であり、「阿漕ヶ浦」を繰り返す「鰯売恋曳網」が、お伽草子の設定のまま、禁漁地の魚売という「皮肉」をあえて活かしていることは注意されてよい。

ところでお伽草子でいえば三島「蔵書目録」中にある「さよひめのさうし」を含む、先に引いた『室町時代小説集』（昭18・12、昭南書房）には、「あこきのさうし」（神宮文庫蔵写本による）を収録している。「さよひめのさうし」をこれに拠ったとすれば、同じ本の中の、以下に少しく述べる、阿漕の挿話、すなわち、禁漁地の戒めを破り、漁を行った咎で、「いきながら、ふしづけにつけ」られ「しづめ」られたという「あこきのさうし」を、三島は目にしなかったろうか。[15]直前作『潮騒』主人公の漁師新治が乗る「太平丸」は、「伊勢海（中略）そこの禁止漁区で、こつそり掛漁をやるの」（第二章）だと書いたばかりの三島である。

さらに言えば「鰯売恋曳網」同時期に「葵上」はじめ謡曲に拠った『近代能楽集』の戯曲をも書いていた三島である。「鰯売恋曳網」構想執筆時に、たとえば四番目物、執心男物で知られる和歌の才ある密漁師及びその霊がシテの謡曲「阿漕」[16]が、全く念頭になかったと考えるのは難しい。

謡曲「阿漕」の概略は以下のとおりである。

伊勢神宮参詣を思い立った九州日向国の男（ワキ）が伊勢の国阿漕ヶ浦で老いた漁師（前ジテ）に出会う。老人は「かく浅猿き殺生の家に生れ」[17]物の命を殺す明け暮れのわが身を悲しむ。阿漕ヶ浦の縁の古歌を口ずさみ興じあう（『古今和歌六帖』三「鯛」の「逢ふことをあこぎの島に引く鯛のたび重ならば人も知りな

ん」が本歌、『源平盛衰記』八「讃岐院事」の「伊勢の海阿漕が浦に引く網も度重なれば人もこそ知れ」を変形した歌）。和歌の引用に老漁師の風流心が示される。やがて日向の男が、阿漕ヶ浦の謂れを尋ねると、老漁師が語りだす。

〝この阿漕ヶ浦は「伊勢大神宮御光臨よりこのかた、御膳調進の網を引く所」であり、近隣の漁師はここで漁を行いたかったが神前ゆえ禁漁としていた。ところが「阿漕と云海士人（蜑人）」は「夜々忍びて網を引く」、度重なって露顕し縛せられ「所をもかへず」その浦の沖に沈められた。漁師の生業が殺生である罪深さだけでなく禁漁を犯した重なる罪によって冥途でも間断ない呵責の責めを負っている。重なる罪を弔ってください。〟

こうして自らが阿漕の霊であると告げた老漁師は罪障懺悔のため日向の男に逗留を頼み、俄に暗くなって疾風とともによせ来る荒波に消え失せる。

浦の男（アイ）が登場し日向の男に阿漕が浦の謂れを語り、供養を勧める（アイ、退場）。

日向の男（ワキ）が法華経を読経し、弔う。すると阿漕の霊（後ジテ）が現れ、密漁を再現する。

今宵はすこし波荒れて、御膳の贄の網はまだ引かれぬよなふ、「よき隙なりと（中略）忍び忍びに引く網の、沖にも磯にも舟は見えず、ただわれのみぞあご[18]の海。

しかし、漁の魚は今ではかえって「悪魚毒蛇」となって、経は滅罪成仏のたよりになるはずだが…、〝八寒地獄の紅蓮地獄、大紅蓮地獄で肌は寒冷で裂け紅蓮のようになり、八熱地獄の焦熱地獄、大焦熱地獄で皮肉が熱さで焦げ糜爛、絶え間ない地獄の苦しみをどうぞ助けてください〟。阿漕の霊は痛苦のなか、救済を請いつつ、波間に消え入る。

荒天の間隙を縫って御膳調進の網は見えず、「ただわれのみ」だと、執心の密漁を「執心の網」を操りながら、再現していくリアルな描出。そうしたなかで間断ない痛苦を抱えながら波間に消える阿漕の霊は、読経によっても救済されることがない。

つまり、「阿漕が浦」とは、禁漁地であるのにこれを犯して露顕し、捕縛され沈められた阿漕の霊が罪の報いで地獄においても阿漕の名で苦しみ続けているという惨憺たる故事を記憶している場所なのである。

歌舞伎についてのちに三島は次のように語っている。

悪といふものには、色んな悪があります。権力悪もあります。（中略）因習悪もあります。それからまた官能的な悪もあります。あるひは端的に言つて嘘を吐くこと、へつらふこともあるでせう。／さういふ人間の悪の固りみたいなものが、美しい華を咲かせたのが歌舞伎である。（中略）／とにかく歌舞伎は悪徳の巣なんです。歌舞伎からもし、さういふものを全部追放して、道徳的な美しいもの、清潔なものであ

る、歌舞伎といふものはどこの世界に出しても恥ずかしくない、それこそ期待される人間像だけを描いた美しいものである、ともしさうしたいのなら、さうしたらよろしい。その瞬間に歌舞伎はなくなつてしまふ。／（中略）美の魅惑は、もうどんな道徳観念で律しても律しきれない不思議なものを出して来たわけです。

（「悪の華――歌舞伎」、昭和四五年七月三日講演、初出は昭63・1）

「鰯売恋曳網」は、貴種としての蛍火、侍の血を引く猿源氏の恋の成就を描いている。しかし一方でこの作品は、網を曳き操る阿漕の求める救済が成就しない苦しい所作をもつ「阿漕」の空間を起点とし、その地「阿漕ヶ浦」を含む呼声を恋の契機としているのである。「原本」の「猿源氏草紙」とは異なり、重要な恋の端緒である以上、この「阿漕ヶ浦」は単なる「皮肉」にとどまるものではない。「美し」い呼声を繰り返すハッピイエンドの劇は、その呼声の裏打ちに「悪」の地獄の責苦の「暗い」「負ひ目」があってこそ成立している。

四

「海と夕焼」は『群像』（昭30・1）に発表された。後年の三島が「もつとも自分の好きな短篇[19]」五編のうちの一つと言えるほどに「愛着がある」と述べていた作品である。さらに晩年の短編集自作解説でも、「憂国」「詩を書く少年」とともに「私にとつてもつとも切実な問題を秘めたもの[20]」とも述べた短編である。「秘めた」というやや思わせぶりな作者後年の自作自注には慎重に対応するべきであるが、「切実」は看過できない字句である。

文久九（一二七二）年晩夏の夕暮れ、鎌倉建長寺裏の勝上ヶ岳頂に、聾唖の少年とのぼった碧眼老齢の寺男安里は、自身の来歴を語る。安里は「夏と秋とが争ひ合つてゐる」空に「横ざまに、鰯雲がひろがつてゐる」のを見てその鰯雲に「羊の群」を想起、そこからかつてセヴェンヌの羊飼いであった遠い昔からの流浪を語るのである。そのことばは「日頃彼が達者に操る日本語ではな」く、「故里の中央山地の方言をまじへた仏蘭西語」である。聾唖の少年に向けての異国の言語による語りは二重に伝達の不可能が示されているような設定だが、少年は安里の趣意を「聡く」「自分の目へ直に映し出す」ようにみえる。

> 少年には何もきこえず、少年の心は何事をも解さない。が、その澄んだ目はいかにも聡く、安里の言葉をではなく、安里の言はうとするところを、青い澄んだ目から自分の目へ直に映し出すことができさうに思はれる。

つまり安里のかかえる想念は直に映し出され伝えられるべきものだと言表されているのである。

安里が語る、「第五十字軍が一旦聖地を奪回したのに、また奪ひ返された千二百十二年のこと」、という、聖地エルサレム奪還のための少年たちの行動と、実際にはマルセイユに集結するも破船、奴隷化、流浪の末路を辿る経緯は、子供十字軍の史実と照応する。エティエンヌが主導した子供十字軍の史実と異なり、安里の出身地をエティエンヌのヴァンドームではなく三島所有のティーク『セヴェンヌの叛乱』[21]に描かれる激烈な宗教戦争の地であるセヴェンヌに変えている点などを含め史実との相違については小埜裕二[22]氏の論考がある。その子供十字軍について、石井和夫[23]氏が指摘し小埜氏同論考が上田敏抄訳については「直接的な典拠というには照応性に乏しい」としつつも言及するマルセル・シュオブ『小児十字軍』をみておこう。

上田敏抄訳の『小児十字軍』には「浮浪学生の話」（初出『三田文学』大2・2）、「癩病やみの話」（同『三田文学』大2・3）、「法王の祈禱」（同『芸文』大4・1）があるが、このなかで「法王の祈禱」は注目しておくべきであろう。ここには「小児十字軍」について、それが「善い業で無い」という立場で、聖地奪還の不可能について、法王が「主よ」と語りかける祈禱の形式で、「海と夕焼」の安里が話すような経緯、すなわち、マルセイユの海が分かれて聖地に赴けるはずだという「狂惑」的想念や、「人買に売られる」といった話が記されている。三島生誕後刊行の『上田敏全集　第二巻』（昭3・8、改造社）で引用しておく。

而していかなる心の狂惑にや七千有余の小児等は、それとなく心ひかれて家を棄て出た。御十字架（みくるす）と杖とをもつて、旅に出でた者が七千人もある。何の武器も有つてゐ無い。頼るべ無き幾千人の小児等よ、われらの恥辱よ。彼等は真の教を弁へてゐない。わが臣下どもが尋ね問ふと、一斉に答へて、聖地の恢復の為、耶路撒冷（イエルサレム）へ行くといふ。さりとて海は越されまいと訊けば、否海は波をわけて干上り、通路を開くに相違無いと答へる。信心深い世間の親たちが、彼等を引留めても夜の間に門を破り、垣を越えて了ふ。小児等の多くは貴人の落胤である。不憫極まる者どもかな。主よ、是等の嬰児は皆破船の憂目を見て、追つてモハメツトの宗門に渡される。バグダツトの帝王は遠い其宮殿に待伏してゐる。或はあらくれの船乗の手に落ちて人質に売られる。／主よ、教法の掟に従つて、言上する事を、容し給へ。必定この小児十字軍は善い業で無い。之が為に御墓の恢復は思ひもよらぬ。唯、正しき信仰の外端に徇ふ浮浪の徒を増すばかりである。[24]

（傍線引用者）

まず、傍線のように、シュオブ作、上田敏訳のこの作品において、「小児十字軍」の多くが「貴人の落胤」であったという一文は注意されてよいであろう。三島が同時期作品『潮騒』の藍本に用いた「ダフニスとクロエ」では牧人ダフニスは、実ハ富貴の生まれという貴種流離譚であったが、「小児十字軍」から人買いに

買われ流竄を経た牧人安里に、実ハ、の「貴人の落胤」を重ねてみることも可能であるかもしれない。少なくとも三島は直前に、牧人が貴人の出であったという作品に拠って自作を完成させていたのである。ただし重要なことは、安里と同様に、そして『沈める滝』の主人公について三島が言うのと同様に、自らの意思で流離したということである。

ところでここでは法王によって「御墓恢復は思ひもよらぬ」好ましくない「業」であり「浮浪の徒を増すばかり」の行動であると指弾されている、しかし「小児十字軍」は聖地をめざしてしまっており、作品末尾で法王は「わからぬ」と言いおさめざるを得ない。

効果を考えれば無益どころか奴隷や流浪の民となる危険を十分にはらみながら、それでも進まざるを得ない、という「小児十字軍」のありようを伝える「法王の祈禱」は、三島「海と夕焼」安里が、「安らひ」の今日もなお思い返さずにはいられない「自分等を追ひやつた」「未知なるものへの翹望」をおもわせる。

安里の心には今安らひがある。帰国の空しい望みはとうに捨て去り、日本の土に骨を埋める覚悟が出来てゐる。（中略）それだといふのに、夏の空を夕焼が染め、海が一線の緋にかがやくときには、足はおのづと動いて、勝上ヶ岳の頂きへ向はずにはゐられない。／夕焼を見る。海の反射を見る。すると安里は、生涯のはじめのころに、一度たしかに我身を訪れた不思議を思ひ返さずにはゐられない。あの奇蹟、あの未知なるものへの翹望、マルセイユへ自分等を追ひやつた異様な力、さういふものの不思議を、今一度確かめずにはゐられない。さうして最後に思ふのは、大ぜいの子供たちに囲まれてマルセイユの埠頭で祈つたとき、つひに分れることなく、夕日にかがやいて沈静な波を打ち寄せてゐた海のことである。

いま、しずかな稲村ケ崎辺の海を見ながら、「いくら祈つても分れなかつた夕映えの海の不思議」を「ありありと思ひ出す」安里には、「異様な力」「未知なるものへの翹望」がそれを変化させることができなかった、「沈静な波」の平穏な海ある空間に存在したことを想起し続けている。

自作自注で三島は安里の分かれなかった海への拘泥を、「戦争体験」における「神風が吹かなかつた」ことへのそれの寓意で読み取る向きのあることに言及し、「私の戦争体験のそのままの寓話化ではない」とした上で、「もつとも私の問題性を明らかにしてくれたのが戦争体験」と述べた上で自身の文学的自覚を次のように記している。

「なぜあのとき海が二つに割れなかつたか」といふ奇蹟待望が自分にとつて不可避なことと、同時にそれが不可能なこととは、実は「詩を書く少年」の年齢のころから、明らかに自覚されてゐた筈なのだ[20]。

「翹望」「異様な力」による「不思議」が「不可能」であり平穏が変わりなく平静「沈静」がつづくことを知悉しながらなお、あるいは「不可能」であるからこそ、そうしたものを求める「翹望」が「不可避」であること。

今や「安らひ」の日々を過ごす安里に、「不可能」を承知でなお、あるいは「不可能」であることによってこそ、異様な力が流浪流離に追いやった日々を想起せずにはいられないという「不可避」、その不可能と不可避の両方の存在が、さらにいえば平穏なかの自らの意思による「暗い」「負ひ目」が、この作品にはみてとれるのである。

五

ハッピイエンドの「鰯売恋曳網」、今は「安らひ」のなかにある安里を描く「海と夕焼」、戯曲と短編の相違はあるが、三島のいう「シーソオの両端」であるこの二作には、平穏のなかの「破壊」的な痕跡や記憶、「清冽」の今日のなかの「暗い」「負ひ目」という、いわば「明」のなかの自らの意思による「暗」の併存がみてとれる。

「鰯売恋曳網」、「海と夕焼」は、「沈静」で平穏ななかに貴人の流離、ただし自らの意思による流離とその結果という「暗い」「負ひ目」をしのばせながら表現したものといえる。ハッピイエンドのきっかけとなった鰯売の呼声を「美し」いという蛍火実ハ丹鶴城の姫の流離のみならず、その呼声に、元侍子息の鰯売猿源氏がいう阿漕ヶ浦、そこに沈む阿漕の逸話のごとく。「貴人の落胤」も多いという「小児十字軍」の安里が鎌倉稲村ケ崎にマルセイユの沈静な波をみる、その流離のごとく。こうした「調和」のなかに破壊的な「怖ろしい」「暗い」「負ひ目」を蔵している、別言すれば、自らの意思による「暗い」「負ひ目」によってこそ調和的な平穏が表現される、という意味で、少なくとも昭和三十年前後の三島由紀夫における方法上の問題を含む貴種流離譚の重要性がみてとれるのである。

注

（1）デキ王子の挿話の意味と貴種流離については、拙稿「三島由紀夫『潮騒』考――麻績王とデキ王子――」（『湘南短期大学紀要』9、平10・3）にて論じている。

（2）大岡昇平・寺田透・三島由紀夫「創作合評」（『沈める滝』）（『群像』昭30・5）における三島の発言。

（3）該作における貴種流離の問題については、拙稿「三島由紀夫『沈める滝』考――変化の不可抗性――」（『國學院雑誌』105(11)、平16・11）にて考究した。

（4）「猿源氏草紙」において、安達敬子「『猿源氏草紙』攷」（『国語国文』63(11)、平6・11）は、南無阿弥陀仏の「教唆」によって猿源氏が扮装した大名が宇都宮氏であったという選択が、「蛍火を和歌説話によって言いくるめる展開

には最も適切」であった理由として、室町期に「関東八館の一で下野国に勢威を振るい、足利幕府と密な関係を結んでいた」のみならず、「何よりも文学史上、この一族は鎌倉期、関東において宇都宮歌壇を主宰し和歌と蹴鞠に秀でた学芸の家としてきこえていた」ためであることを、以下の二論文を掲げつつ指摘している。石田吉貞「宇都宮歌壇とその性格」（『国語と国文学』24(12)、昭22・12）、小林一彦「宇都宮歌壇の再考察―笠間時朝・浄意法師を中心に―」（『国語と国文学』65(3)、昭63・3）。

（5）三島「鰯売恋曳網」とお伽草子「猿源氏草紙」との比較を行ったものに、木谷真紀子「三島由紀夫「鰯売恋曳網」論――「お伽草子」と「笑劇」と――」（『同志社国文学』56、平14・3、平19・12、翰林書房、木谷『三島由紀夫と歌舞伎』所収）がある。三島作品における猿源氏の「情けない」造型から笑劇を考える論であり、三島文学における平穏のなかの〈暗さ〉の内包を考える本稿とは方向を異にするが掲げておく。

（6）横山重・太田武夫・森武之助校訂『室町時代物語集　第四』（昭15・9、大岡山書店）。

なおたとえば事典項目につき道標的記述を行っている沢井耐三「さよひめ」（大曾根章介他編、平10・5、明治書院、『日本古典文学大事典』）は「諸本により人名・地名に相違がある」としながらも、奥州商人を「こんかの大夫」と示すなど『室町時代物語集』所収のものに近い筋を紹介している。やや煩瑣になるが『室町時代物語集』所収「さよひめ」に拠る梗概を記しておく。

大和国松浦谷壺坂の富者である京極殿には子がなかったが、夫婦で観音参詣の甲斐あって女児誕生、これがさよ姫である。しかし姫四歳の折、姫の父は病死、「みめかたちならひなく」賢く育ったものの、次第に家財家来も失っていく。貧窮の中、姫十六歳、亡父の十三回忌、なんとか親の菩提を弔おうと、折から聴いた興福寺の聖の説法「身をうりても」供養おこなうべし、を心に留める。

そうしたある日、奥陸奥のこんかの大夫が奈良の都にやってくる。土地の池の大蛇に所繁盛家繁盛のため「みめよき姫を、いけに、そなふる」ため人買に来たのであった。興福寺南大門の高札を見たさよ姫は謝金五十両を得て十三回忌を行うと母と泣き別れ、大夫に連れられて徒歩にて奥陸奥への長旅に出る。ようやく奥陸奥安達郡に着いたが「姫君は、にえにそなはる、事をはしらす」にいたため、大蛇の贄として「あすをかきりの、いのち」なのだと「ふるさとのはゝうへ」なげかわしと思い遺書を認める。

いよいよ生贄となる日、船で池に漕ぎ出すや風雲激しく大蛇火炎の息を吐くが、さよ姫、自分とともに大蛇も成仏せよと読経、これが奏功し、大蛇が崩れ去るとともに女人が現れる。彼女が語るには、自分は伊勢国二見浦の者だが

幼時に母が死に、継母に憎まれ、迷い出で、商人に謀られ売られてこの池の人柱に捧げられた。九百九十九年、所の神と崇められたが、大蛇身の苦しみは絶え間ないものであった。しかし今の読経で苦患を免れた、と言う。お礼にさよ姫に竜宮城の第一の宝、如意宝珠を奉り、姫を故郷の猿沢の池のほとりに送り届ける。

さよ姫は件の宝珠で母の目を治し、故郷松浦谷に帰り宝珠で宝を降らせて富貴となり大和国司と結婚、子沢山となり、不老不死の徳を備える、これ竹生島弁財天の本地である。

以上が「さよひめ」であるが、『室町物語集　第四』に続けて収録されている同類の物語の短縮版「壺坂物語」（筑土鈴寛蔵本に拠る）では、この池の大蛇は姫を壺坂に送り届けた後、壺坂観音となった、と本地譚としている。

（7）「蔵書目録」、島崎博・三島瑤子編『定本三島由紀夫書誌』（昭47・1、薔薇十字社）所収

（8）「さよひめのさうし」は戸川濱男蔵古写本による。なお他に類書を比較検討した結果の比較的新しい編纂本で『室町時代小説集』に近似している『室町時代物語大成　第六』所収の赤木文庫蔵古写本に拠る「さよひめのさうし」（横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』（昭53・3、角川書店））も参看した。

（9）女方万菊の示す若い演出家川崎への「厚意」に「恋」を見出す増山の目を通して、地の文では川崎について次のように記されている。「この青年の目は明るすぎて、理論には秀でてゐても、芝居の裏の暗い美的な魂をのぞくことはできなかつた。」（「女方」「六」昭32・1）

（10）西村亨「貴種流離譚」（西村編、昭63・7、大修館書店『折口信夫事典』）、山崎正之「貴種流離譚」（大林太良・吉田敦彦監修、平9・6、大和書房『日本神話事典』）、野村純一「貴種流離譚」（有山大吾・石内徹編、平12・2、勉誠出版『迢空・折口信夫事典』）。なお三島『潮騒』と貴種流離譚については前述したように注（1）拙稿にて論じたことがある。

貴種流離譚についてはたとえば岩崎武夫「義経記・説経・幸若　貴種流離譚としての視点から」（日本文学協会編、昭62・6、大修館書店『日本文学講座5　物語・小説Ⅱ』所収）が折口「小説戯曲文学における物語要素」をふまえつつ「貴種流離譚のパターン（主人公の没落―流離―転生（死））」を掲げている他、阿部好臣「貴種流離譚の基本構造」（同前書所収）が「〈貴種流離譚〉に〈罪〉の問題が重要であること」を特記しているなどの指摘もあるが、ここでは三島の言及を軸に考察していく。

（11）大島建彦校注・訳「猿源氏草紙」、頭注「海老名南無阿弥陀仏」（大島校注・訳、昭49・9、小学館『日本古典文学全集36　御伽草子集』所収）、大島校注・訳「猿源氏草紙」

頭注、「海老名南無阿弥陀仏」（大島・渡浩一校注・訳、平14・9、小学館『新編　日本古典文学全集63　室町物語草子集』所収）。大島氏頭注は南無阿弥陀仏についてさらに次のように続けている。「『申楽談義』によると、「歌舞音曲に通じて、曲舞「東国下り」の節をつけたという。『常楽記』によって、永徳元（一三八一）年没と知られる。海老名家は、村上源氏の末流。その家名は、相模国高座郡（現神奈川県海老名市）の地名から起る。「阿弥陀仏」（略して「阿」）はおもに時宗で法名の一部につける。」

（12）市川裕見子「三島由紀夫歌舞伎作品についての覚え書き―その二『鰯売恋曳網』」（『外国文学』（宇都宮大学外国文学研究会）49、平12・3）も「話の展開からして、妻の父親が、婿の恋の加勢をするというのは、現代人の感覚では受け入れにくい」と指摘している。

（13）「猿源氏草紙」における弁明は、宇都宮が上洛し将軍を含めた宗匠とともに連歌となったおりのことを思い起こして、という設定となっており、言訳もやや冗長になっているが、三島「鰯売恋曳網」は、上演のために簡略化したと思われるものの、いずれもほぼこれらに拠っている。注（11）に引いた大島氏の頭注を参照しつつ触れておく。すなわち「猿源氏」には「怨みわびたる猿沢の池」「わぎ妹子が寝乱れ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞ悲しき」（『大和物語』百五十、『拾遺集』哀傷、『柿本集』などに、第二句が「ねくたれ髪を」として出ている。柿本人麻呂の作と伝えられる。」（同注（11）大島氏『新編』頭注）を引く。また「鰯」については『古事談』一の「鰯ハ良薬為リト雖モ、公家ニ供セズ」や『本朝食鑑』八の「肥健長生セシム」にある鰯の同時代的特性と、和泉式部と保昌との挿話から「日の本にいははれ給ふ石清水参らぬ人はあらじとぞ思ふ」の歌に「鰯」と「石清水」をかけて釈明に用いている。なおこの歌について同注（11）大島氏『新編』校注は次のように記している。「『八幡愚童訓』下に、八幡大菩薩の託宣の歌として、「日ノ下ニイハヽレ玉フ石清水マイラヌ人ハアラジトゾ思フ」とある。この託宣の歌が、「鰯を食わない人はいない」ということにかけて用いられたもの。志賀理斎の『三省録』に、紫式部の詠んだ歌として、ここと同じ意味で用いられている。」

（14）市古貞次校注『御伽草子（上）』（昭60・10、岩波文庫）

（15）「あこきのさうし」については夙に石川透氏が「山岸文庫蔵『落窪の草子』奥書の真偽――『阿漕の草子』から多田義俊偽作説に及ぶ――」（『藝文研究』52、昭63・1）において「『阿漕の草子』の本文自体が近世の偽作と思われる」と述べていたが、同氏は「阿漕の草子」と謡曲「阿漕」が「密接」な関連を持つことについて、後年にも次のように述べている。「『阿漕』と『阿漕の草子』との関係は、御伽草子が謡曲へと影響を与えた、年代のわかる貴重な例と考

えたいのであるが、残念なことに、『阿漕の草子』には、江戸時代の人物による偽作説が古くから存在しているのである。（中略）内容からすると、平次盛という名前自体が、古浄瑠璃『あこぎの平次』以降江戸時代に流行した命名であること等から、本書［『阿漕の草子』―引用者注］の成立は江戸時代で、偽作説のある多田義俊の手により、本文も奥書も制作された可能性が高いであろう。（中略）謡曲『阿漕』と御伽草子『阿漕の草子』との関係は、密接ではあるが、後者は江戸時代の偽作であると思われる。」（石川透「『阿漕』と『阿漕の草子』」、平21・5、三弥井書店、石川『奈良絵本・絵巻の展開』所収、初出は『川崎市定期能　第七十五回』、川崎市、平18・6。）三島において偽書か否かということは問題ではなかったであろう。しかし上掲したのは、タイトルからも明らかな『阿漕』の名をもつお伽草子と謡曲との「密接」な関係性を述べる研究を引くことによって、本稿で続けて検討する謡曲『阿漕』からのアプローチの妥当性を示すものでもある。

(16) お伽草子「猿源氏草紙」における謡曲「阿漕」とのかかわりについては「「阿漕が浦の鰯売」では、自ら禁忌を犯していることを洛中に言い広めていることになる。」という指摘（小原亨「『猿源氏草紙』の方法」、『日本文藝学』33、平8・12）がある。

(17) 引用は西野春雄校注「阿漕」（寛永七年黒沢源太郎刊観世黒雪正本に拠る、西野校注、平10・3、岩波書店『新日本古典文学大系57　謡曲百番』所収）に拠った。他に伊藤正義校注「阿漕」（光悦謡本の上製本（鴻山文庫）に拠る、伊藤校注、昭58・3、新潮社『新潮日本古典集成　謡曲集上』所収）の他、三島存生中の時期における実演のポイントを記した三宅秬一「鑑賞と謡い方のポイント」（高橋誠一郎監修、丸岡明編、昭39・11、筑摩書房『現代謡曲全集第41巻』所収）を参看した。

(18) 「「英虞」は『倭名抄』に志摩の国の（三重県）の地名として見える。『萬葉仙覚抄』に伊勢の名所とするが、歌枕ではない。「網子」と言いかけ、次行の「阿漕」と重韻。」（同注（17）伊藤正義「校注」）。

(19) 「「海と夕焼」は、もし人あって私に、もつとも自分の好きな短篇を五篇、自作の中から選べと言つて来たら、躊躇なくその中に入れたいほど、愛着のある作だ。」（『三島由紀夫短篇全集　5』「あとがき」、昭40・7）

(20) 「集中、「詩を書く少年」と「海と夕焼」と「憂国」の三編は、一見単なる物語の体裁の下に、私にとつてもつとも切実な問題を秘めたものであり」（『花ざかりの森・憂国』「解説」、昭43・9）

(21) ティーク『セヴェンヌの叛乱』（独逸ロマンチック叢書六、神保謙吾訳、昭18・9、青木書店）。なお本書は既述の三島「蔵書目録」にみえる。

（22）小埜裕二「三島由紀夫「海と夕焼」論――「不思議」を消し去るもの――」（『上越教育大学研究紀要』22(2)、平15・3）。

（23）石井和夫「デカダンを継ぐもの――『海と夕焼』の世紀末」（『叙説』18、平11・1）

（24）『上田敏全集　第二巻』（昭3・8、改造社）。なお他に多田智満子訳「少年十字軍」、同「訳者あとがき」（マルセル・シュウォッブ、多田訳、平10・7、王国社）、多田智満子訳「少年十字軍」、瀬高道助「解題」（大濱甫他訳、平27・6、国書刊行会『マルセル・シュオッブ全集』所収）を参看した。

（25）同注（20）、三島「解説」

附記

お伽草子「猿源氏草紙」の本文としては、三島少年期に刊行されており三島の「蔵書目録」（島崎博・三島瑤子編、昭47・1、薔薇十字社『定本　三島由紀夫書誌』）に掲げられている島津久基編校『お伽草子』（昭11・10、岩波文庫）の他、注に掲げた大島建彦・渡浩一校訳『新編　日本古典文学全集63　室町物語草子集』（平14・9、小学館）、大島建彦校訳『日本古典文学全集36　御伽草子集』（昭49・9、小学館）、横山重・松本隆信編『室町時代物語大成　第六』（昭53・3、角川書店）、さらに市古貞次校注『御伽草子　（上）』（昭60・10、岩波文庫）等を参看した。

引用は特記しない限り新潮社刊『決定版　三島由紀夫全集』全四二巻補巻一別巻一（平12・11～平18・4）に拠った。ルビは適宜省略した。

（はなざき・いくよ　本学教授）